2023年度（2023年7月1日～2024年6月30日）事業報告

□この１年

ヴィエンチャンを歩くと、コロナで止まっていた活気が戻っていることを感じます。国際会議場の直ぐ近く、何年も放置されていた中国資本による高層ビルは高級ホテルとして営業を開始しました。また新しい高速鉄道。ガラガラだろうという当初の見込みはどこへ、ラオスの人々による利用も多く予約が取りにくいようです。昔はどこでも売っていたコーヒーと砂糖、クリームが一袋に入ったインスタントコーヒーは、市場でも片隅に追いやられ、今はアラビカやティピカなどのコーヒー豆が、日本より高値で並んでいます。一方でガソリンは23,000kip（148円）/L、ソバは30,000kip（194円）とインフレは止まりません。ドルとラオス通貨キープとの交換レートもこの一年で、大幅に悪化し、日用生活品を輸入に頼る人々の生活を厳しくしています。収入が増えない中、普通の人はどのように生活しているのか想像できません。政府統計に依れば、中等学校への進学率は下がり、卒業できない子どもが小学校で23％ 中等学校前期課程で37％います。会のインタービューでも生活の厳しさを聞くことが多く、社会の階層化はラオスでもますます進んでいると実感します。

・活動の課題、重点的取り組み

今期開始した第9次中期計画に基づいて、運営・活動はすすめられました。コロナ前から続いていた厳しい財務状況の改善を図ることに注力し、「書き損じハガキ・切手収集キャンペーン」の継続、広報強化によるご寄付の増加、会員の増加、さらに経費削減の継続などにより、財務状況の改善を進めることが出来ました。その一方、ラオス事務所体制の余裕が無く、国際協力ＮＧＯからの事業受託、図書販売などが計画通りにはすすめられませんでした。またタイの財団による奨学金事業受託が無かったことなどにより、ラオス事務所での資金調達はほとんど出来ませんでした。ラオス事務所と東京事務所との情報、意識の共有は、日本人の駐在が復活したことで安定度が増しています。

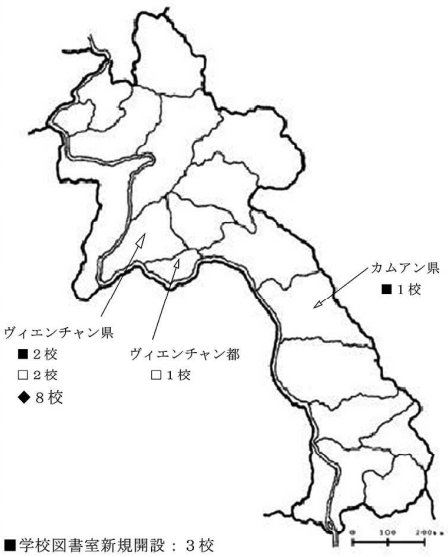
事業活動においては、「ラオス語図書の出版・図書室活動の整備」を基本として、各種事業を継続しました。県や郡教育局と契約を結び、事業の継続的な体制が作られるようにすすめる「中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業」（ＪＩＣＡ草の根技術協力事業）がヴィエンチャン県で継続しています。以前実施した日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業で研修を受けた教員が講師役を担うなど、これまでの成果が継承されています。しかし、先行事業と比較し、学校側の熱意に少し弱さが見られ、課題となっています。出版事業では、より多くの子どもたちのもとに、図書を届けられるようにと、新たに出版する図書については、教育スポーツ省の機関から認証を得ることとしました。この認証により、学校での副読本としての利用が可能となります。

国内では、企業の皆さまの「ラオス語絵本プロジェクト」への参加が増えています。絵本リストが更新され、新しい本をラオスに送ることができはじめています。ただし、日本からの船便による輸送が再開されず、ラオスへ本を届けることに遅れが生じています。今年度もスタッフの増強がなかったことから、支援の皆さまに十分な対応が出来ない面が続いており、課題として残ります。

・成果 ----------

皆さまのご支援の結果、今年度は、ラオス語図書4種類12,000冊を現地で出版し、6か所で新規の学校図書室を開設することができました。今年度末までの累計ではラオス語図書 239種類 952,855冊（図書203/紙芝居20/教科書類6/ニュースレター10）を出版し、ラオスの小中学校10,641校（小学校8,757校、中等学校1,836校　ラオス教育スポーツ省統計2021）のうち、356ヵ所で図書室（うち16ヵ所は地域文庫）を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,328校でフォローをしました。また、これまで全国14ヵ所の子どもセンターの運営を支援し、活動の活性化を支援しました。

2023年度 事業対象地域図



■学校図書室新規開設：３校
□学校図書室フォローアップ：３校
◆中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業８校
〇奨学金事業：ヴィエンチャン県

プロジェクト

＜計画＞ 今期は、ラオスにおいて以下の活動をおこなう。

1. 子どもたちが読書に親しむ環境を整える「読書推進活動」
2. 子どもたちに良質な本を提供する「出版活動」

さらに日本では、ラオスでの実施事業を紹介すると共に自己資金の拡充のために、イベントの参加や実施、出前講座活動、ラオス語絵本プロジェクトなどを展開する。

Ⅰ 読書推進活動

Ⅰ-1 中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業

＜計画＞ ヴィエンチャン県サナカム郡･ムーン郡の8校で、図書室を整備し、「県教育スポーツ局主導で、図書室活用を取り入れた中等学校教育改善の普及体制が構築される」ことを目標に、2023年5月から3年間の事業を実施する。事業は、以下の4つの成果を目指す。

成果1:学校図書室整備と持続的な運営体制の強化
成果2:学校図書室の役割の拡充 「読書の場」から「学習･情報センター」へ
成果3:図書室維持発展のためのネットワークの構築
成果4：図書室を活用した学校教育改善を県内で展開する体制の構築

＜実施＞

事業開始時に、県･郡教育局を中心としたプロジェクトチームを立ち上げ、今期は以下の活動を実施した。

- 「オリエンテーション会議」を開催。行政＝郡教育局、地域＝村教育開発委員会、学校、当会の4者でそれぞれの役割を明記した覚書を取り交わした。
- 郡ごとに「図書室運営ワークショップ」を開催し、図書室の担当教員、村教育開発委員会が一堂に会し、学校図書室の運営や計画づくり、更にSNSの活用について学んだ。
- 3校で図書室を新規開設、5校で既存図書室をリニューアルした。各校の状況に合わせて、本棚や図書を購入し、図書室を整備。担当教員やボランティアの生徒を対象に、図書室の役割を理解してもらうとともに、図書運営の実務を学ぶ基礎研修を実施した。
- 応用研修として、図書室担当の先生と生徒に、図書室サイン（案内･表示）の作り方や、本の魅力を伝える展示の仕方を実践的に学んでもらった。更に、各教科の先生に授業で図書を活用する研修をおこなった。

＜成果と課題＞

学校によるが、全体として、先生方のモチベーションが上がらず、過去に実施した同様の事業に比べて、業務や活動の理解度が低いという問題がでてきた。県･郡教育局と連携し解決策を練り、郡教育局メンバーは担当校を決め、積極的に関わる体制を作ったり、先行する事業で開設した図書室を担当する中等学校の先生方を現場に招き、実践例を紹介してもらった。同じ立場の先生からのアドバイスに、実施校の先生方は耳を傾け、質問をして課題に向き合う姿がみられた。

【ＪＩＣＡ草の根技術協力事業（草の根パートナー型）】

Ⅰ-2 学校図書室の整備

＜計画＞ 小中学校の空き教室に本と本棚を提供し、図書室運営に関する教員研修をおこない、学校に図書室を整備することで、子どもたちが日常的に図書に接する機会をつくる活動を継続実施する。

＜実施＞

新規開設は、上述の事業の3校に加えて、以下の日程で3校に図書室を開設することができた。

2023年9月27日　パーボーン中等学校（HA354）　ヴィエンチャン県ヒンフープ郡
2023年9月29日　ケオクー中等学校(HA355)　ヴィエンチャン県ケオウドム郡
2024年1月25-26　ラオスーベトナム友好職業学校（HA356）　カムワン県ノーンボック郡

【ご支援：福岡那の香ライオンズクラブ 愛知県立常滑高等学校 国際協力団体BWP愛知】

HA=HakArn＝当会が開設する図書室の愛称。ラオス語で愛読の意味

既設置学校図書室の活動継続や再活性化をねらいとして、状況調査をおこなった3か所でフォローアップを実施。スタッフが訪問し、教員や図書ボランティアの子ども達に、図書室運営の再研修を実施した。

2023年12月28-29日　ソーカム小学校（HA25）　ヴィエンチャン都サイセター郡
2024年1月23-24日　パークパン小学校(HA189)　ヴィエンチャン県サナカム郡
2024年1月25-26日　サナカム小学校（HA190）　ヴィエンチャン県サナカム郡

また、4県24校の図書室には、新しい図書のセットを配布した。生徒の年齢にあわせた図書(1校あたり、小学校71冊、中等学校94冊)と、図書貸し出しに使用する文具をセットにして図書室へ届けた。

【ご支援:積水ハウスマッチングプログラム 国際協力団体BWP愛知 ベルマーク教育助成財団】

＜成果と課題＞ 新規開設は、計画どおり1-1事業での開設3校と合わせて6校で開設。フォローアップの状況調査は、計画の10校には届かなかったが、6校を調査し、うち3校を訪問し、リニューアルさせることができた。

Ⅰ-3　ＡＬＣ図書室（ラオス事務所併設図書室）活動

＜計画＞ スタッフによる日常的な子どもたちに対する働きかけを再開する。
学校図書室の手本となるよう、スタッフによる「図書室配架･展示」の実践をおこなう。

＜実施＞

図書室の活動は再開したものの、これまで近隣の中等学校の生徒が、昼休みに利用しに来ていたが、学校による昼休みの外出禁止がコロナ禍以降継続しているため、来館者が戻っていない。また、年間を通じてスタッフの地方出張が多くなり、人数に余裕がないことから、全スタッフが出張することも少なくなく、やむを得ず閉館日が多くなってしまった。スタッフによる「図書室展示」や「図書室サイン」の更新は、今期の終盤に実施することができた。

＜成果と課題＞

ＡＬＣ図書館活性化のためには、スタッフによる日常的な働きかけが必要とされている。今期は人手不足で対応ができなかったが、年度末にスタッフ人数が増えたことから、今後の実践が可能となる。

Ⅱ 出版プロジェクト

＜計画＞ 専門家のアドバイスを得て、質の高い書籍を出版する。
市場を意識した出版を企画する（ニーズ調査の実施し、売れる図書を出版）。
新刊１タイトル、再版４タイトル、合計５タイトルを出版する。

＜実施＞

新規1作品再版3作品の計12,000部を出版した。当会がこれまでに出版した図書・紙芝居は累計239点 952,855部となった。

	作品名	作者名	出版	主な支援者
1	紙芝居 『これはジャックのたてたいえ』 第2版	絵)やべみつのり　原詩)マザーグース　ラオス語訳)ドゥアンドゥアン　ブンヤボン	1,000部	クラウドファンディング2022、キヤノン株式会社、指定募金
2	伝記　『松下幸之助物語』 初版	著者）渡邊祐介　ラオス語訳）チャンタソン インタヴォン	2,000部	大同生命文化基金
3	創作絵本 『ドデカあたまのおばけ』　第2版	文絵)アンパントーン　ペップンポーン	4,500部	書き損じ葉書収集キャンペーン2022-23
4	ラオス語教本 『リズムで学ぶラオス語』　第4版	文)マハー　シラー　ヴィラヴォン 絵)ヴォンサワン　ラムロンスック	4,500部	特定非営利活動法人 地球の木、リコー社会貢献クラブFreeWill,冬募金

1. イギリスの伝承童謡で押韻詩のマザーグースからの一話を、紙芝居作家のやべみつのりさんが紙芝居にした作品。1983年に日本で出版し、ラオス語版は2009年に当会が最初に出版。リズミカルな言葉遊びが特徴。通常のように１人で演じるのではなく、ラオス伝統文化の「スーン（詠唱）」と結びつけて活用されている。
2. 大同生命文化基金の翻訳出版事業に協力し、「ジャパニーズ･ミラーズ」シリーズの本作を翻訳出版。松下幸之助は両親を早くに無くし、生涯病気がちなど苦しい生活環境の中で数々の逆境を乗り越え、大企業を作り上げた。その生き方を通して、自ら成長しながら人生を切りひらいていくことを感じてもらえたらとの趣旨で出版。

3. ラオス人若手作家による切り絵の絵本。夜更かししている子を見つけてはパクリパクリと食べてしまうおばけの話。ちょっぴり怖くてユーモラスな話は、ラオスの子どもたちが大好きな作品。書き損じ葉書キャンペーンでの多くのご協力により、印刷部数を3000部から4500部に増やして出版することができた。

4.ラオスの著名な文学者マハーシラー ヴィラヴォンによって編纂されたかつての小学校教科書に、多彩なイラストを加えて再編集したもの。ラオス語のしくみや発声を取り入れた詩で、自然と学べるようになっている。今回の再版では、より多くの教育現場で活用されることを目指し、教育スポーツ省のカリキュラムや教科書の作成などをおこなう機関「教育科学研究所(RIES)」からの認証登録を得た。

＜成果と課題＞

４タイトルの出版については計画通り出版できた。残り１タイトルについては、作者の進行が遅れたこともあり、次年度での実施となった。

Ⅲ 子どもセンタープロジェクト

＜計画＞ 活動支援は引き続き休止とするが、活動状況を確認しつつ、センター図書室への図書の補充の支援を継続。

＜実施＞今期は活動状況の確認のみおこなった（現在活動をおこなっているセンターは3か所)。

Ⅳ 子ども教育支援事業

＜計画＞ 中等学校の生徒向けの奨学金支給事業を継続して実施する。

Ⅰ-1の事業地であるヴィエンチャン県ムーン郡とサナカム郡の中等学校8校にて、奨学金の給付を開始する。

＜実施＞

昨年度までの奨学生で在学中の最後の1名の生徒に奨学金を給付。この1名は2024年6月に学校を卒業した。私たちがALC奨学金事業を開始して6年が経ち、奨学金を受け取った生徒は18人、中等学校を無事卒業した生徒は16人となった。

今年度より8か所の中等学校で奨学金給付を開始する予定であったが、今期は準備期間とし、開始は次年度からとなった。学校に通うために必要な学用品や交通費などの金額の調査をおこない、給付する奨学金の金額の見直し作業をおこなった。

＜成果と課題＞

奨学金を受給した生徒達に、卒業後の進路などその後の状況に関するインタビューを行った。技術専門学校や大学に進学したり、夢だった海外留学に行った人や、家族と一緒に生活するために、養豚場や靴工場で働く人、進学資金を貯めるために首都にでてレストランで働いている人もいる。

家族の経済状況を考えると、奨学生でなければ、勉強を途中であきらめなければならなかったと思われ、自分自身の人生を切り開く一助となっている。

【ご支援：マンスリーサポーター】

Ⅴ 国内事業

Ⅴ-１ 各種イベント

＜計画＞ 資金調達や新たな支援者の開拓を目的とし、イベントへの参加や開催を効果的におこなう。

＜実施＞

恒例のピーマイパーティは、いつもの会場が確保できず、活動報告会を兼ねたイベントとした。第1部は一時帰国中の渡邉淳子駐在員がこの１年の現地での活動の様子を報告。第2部は、小規模ながら手作りのラオス料理を用意し楽しんでいただいた。例年実施している東京谷中の「エスノースギャラリー」での展示販売会は継続して開催。京都哲学の道の「桜谷町47」での展示販売会はスケジュールの都合から開催できなかった。今期は、以下のようなイベントを開催、出展した。

8/1-31	カフェ＆ダイニング素々 展示委託販売(12月、5－6月にも実施)
8/8-21	京都恵文社ブックフェア 展示委託販売
12/16-26	the ETHNORTH GALLERYラオスの手仕事vol.10～民族の誇りと挑戦～ 開催
2/3	平和・国際フェスタ「ハートカフェ」出展
4/27	活動報告会＆ピーマイイベント 開催
5/25-26	ラオスフェスティバル2024 出展

＜成果と課題＞

年間を通じて個人や団体での物品販売協力があり、特に個人での販売協力が徐々に増えており、一定の収入に繋がっている。ただ、大きな収入源であった京都でのイベントができなかったため、収入は減った。

Ｖ-２ 出前講座活動

＜計画＞ 学校を訪問したり、オンラインを繋いで実施する「出前講座」「講師派遣」を、年間3～4件を実施する。

＜実施＞

今年度は以下の学校に講師派遣や訪問受入れをおこない、ラオスや国際協力、当会の活動への理解を促進することができた。

7/3	学習院女子大学 講義 （全５回実施）
7/4	愛知県立常滑高等学校贈呈式(オンライン)
9/5	米沢市立第六中学校　修学旅行訪問受入れ

＜成果と課題＞

オンラインで東京・ラオスの事務所とむすび、出前講座を実施することも一般化してきているが、活動理解を深めることや支援を増すためには、実施方法を工夫する必要もある。

Ｖ-３ ラオス語絵本プロジェクト

＜計画＞ 支援者の拡大及び開発教育として、個人協力者に加えて、企業・学校・団体との連携を継続して実施する。

・プロジェクト参加者が活動支援を継続するように、組み立てを工夫する。

・年間参加者70件、1000冊の完成絵本をラオスに届ける

・絵本リストの改訂（5冊新たに翻訳し追加）と、既存の翻訳シートの内容確認を進める（目標25冊分）

＜実施＞

今年度のプログラム申込者は、個人団体を合わせて46件で、合計1,100冊の絵本が作成された。

沖電気工業株式会社、株式会社ニコンの絵本作りイベントは引き続き在宅での実施で、継続している。また日本フィランソロピー協会のボランティアウェブを通して個人の新規参加が増加するとともに、株式会社ジェーシービーも社内で取り組んでいただいている。

ラオスへ送る船便が引き受けを休止しているため、航空便での輸送を増やし対応した。また、スタッフの出張時に手荷物運搬を行うとともに、ラオスを訪問する支援者に運搬の協力をいただき、完成した絵本をラオスまで届けている。

「積水ハウスマッチングプログラム」の支援により、新しい絵本を6作品、『おつきさまこんばんは』(林明子)『きんぎょがにげた』(五味太郎)『ぞうくんのさんぽ』(なかのひとたか なかのひまさたか)『ぺんぎんたいそう』(齋藤槙)以上 福音館書店、『たっちだいすき』(聞かせ屋。けいたろう ひろかわさえこ アリス館)『もったいないばあさん』(真珠まりこ 講談社) を翻訳し、絵本リストに追加することができた。次の翻訳候補絵本も準備されており、出版社への許可手続きをすすめている。

＜成果と課題＞

懸案であった、翻訳絵本リストの改訂を進めることができた。また、既存の翻訳シートのデジタル化と内容確認もインターンの協力により進めることができた。

会の運営

＜計画＞ 国内においては、目的、対象と成果を明確にした多様な広報活動を強化することで、より多くの方々に活動の理解をいただき、資金調達に結びつける。

ラオスにおいては、学校における読書推進事業や図書出版の分野において、国際協力機関との連携を強め事業受託をすすめる。また、次の活動の担い手となるよう、スタッフの育成に努める。

Ⅵ 理事会

＜計画＞ 経営、資金調達、プロジェクト進行などの状況を把握し、プロジェクトの進捗、成果の確認により、組織運営を管理し運営方針の決定をおこなう。年に３～４回開催。

広報や出版等の事業分野において、理事は役割を積極的に担う。

＜実施＞

今期の運営責任は以下の理事・監事によって担われた。

理事	塩谷 光	新藤 雅章
	チャンタソン インタヴォン	西村 恵子
	野口 朝夫	森 透
	森 千也	岡田 龍之介
監事	脇田 康司	矢崎 芽生
顧問	長野 ヒデ子	やべ みつのり

理事会を4回開催した。オンラインでの参加も含め延べ38名の参加となった。

第1回 9/2　8名出席(うちオンライン出席1名、書面表決1名)

主なテーマ:第9次中期計画の修正、第22期修正事業計画案・予算案の確認と承認、第21期事業報告案・決算報告案の討議と承認、監査報告承認

第2回 12/10　10名出席（うちオンライン出席1名、委任状1名）

主なテーマ:経営状況と財務状況報告、現地事業進捗報告、各種キャンペーンやイベント実施報告

第3回 2/24　10名出席（うちオンライン出席1名、委任状1名）

主なテーマ:経営状況と財務状況報告、現地事業進捗報告、イベント実施検討と報告

第4回 6/16　10名出席（うちオンライン出席1名）

主なテーマ:財務状況、現地事業進捗報告、第23期事業計画・予算案の承認、アドバイザー契約の承認

（上記は、理事 監事の出席人数を含む。その他、アドバイザー、スタッフが陪席している）

総会

＜実施＞

9月16日、2023年度通常総会を活動会員38名（書面表決者、委任状提出者含む。オンライン参加は9人)、活動協力者5名、計43名が参加し開催した。2022年度第21期の事業報告案及び決算報告案及び、理事の承認・監事の選任に関する事項が承認され、2023度第22期の事業計画書、予算及び第9次中期計画が報告された。第2部は代表のチャンタソンが最近のラオス事情を話し、参加者からの様々な質問を交えて和やかな懇談会となった。

Ⅶ 東京事務所　運営

＜計画＞ 事務所運営はリモートワークと事務所での勤務を併用しながらおこなう。

業務委託契約スタッフを雇用する。

会計の専門性のあるボランティアスタッフに業務の一端を担ってもらう。

＜実施＞　以下の2名で運営を担当した。

野口朝夫	常勤非専従事務局長	1992年1月入職
赤井朱子	スタッフ	1995年4月入職

この他、 アドバイザーとして小林毅に組織運営および事業運営に加わってもらった。

事務所メンバーとアドバイザーが参加する会議を週1回開催し、業務進捗の確認や調整などをおこなった。小林アドバイザーには、主に資金調達業務において、募金計画や各種キャンペーンの実施のアドバイスや支援を受けた。また、「Ⅰ-1中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業」において、専門家として現地を訪問し研修講師を担っていただいた。

広報担当者を10月～1月に業務委託契約し、冬募金キャンペーンやマンスリーサポーター通信の取材、機関誌の記事作成などに取り組んだ。さらに専門性のあるボランティアが会計や翻訳業務などで業務の一端を担ってくれた。契約スタッフの募集活動はできなかった。

Ⅶ-１　事業運営

＜計画＞ これまでの理念･使命を継続し、ＮＧＯの倫理を保ちつつ、運営の質をより高める。

両事務所間で理念･使命の共有を高めるため、定期的な会議の実施や年次計画の評価と策定を協働して実施。

会員および支援者の継続率を高め、新規支援者を増やし、寄付金収入を増やす。

これまでの活動実績を和文･英語で事業ごとに公開し、これらを広報ツールに用いる。

＜実施＞

・東京･ラオス事務所間での理念、情報の共有などは、合同会議の定期的な開催（年7回実施）ができたことと、駐在員が復帰したことで成果があった。年次計画の評価、次期計画案の策定などにおいても、事務所間での合同作業がおこなわれた。

・賛助会員の新規加入は12名で、前年度の10名より若干増えた。今期は、会員の継続率や2口以上の会員が増加し、年度末の会員数は120名となった。

・英文の活動紹介リーフレットを作成。一部は成果があったが活用するにまでに至っていない。

・ニュースレターやホームページのリニューアルは、人手が足りないことから進めることができず、広報力を強化することはできなかった。

・今期は以下の通り、専門家派遣及び事業調整派遣がおこなわれた。

　・小林毅（アドバイザー）　2023年8月9日～17日、10月15日～21日

　・下田尊久（図書館情報学専門家）2024年2月24日～3月3日

　・伊藤久平（広報担当 業務委託）　2023年10月15日～21日

　・赤井朱子（スタッフ）　2024年2月10日～22日

この他、チャンタソンと野口が所用でのラオス出張の際、現地にて会議や調整をおこなった。

＜成果と課題＞

限られた人的資源の中、メディアに対する発信はおこなわれ、ある程度成果となったが、より広く活動を認知してもらい、支援者となっていただくために、もう一段の工夫が必要とされる。

Ⅶ-２　組織運営

＜計画＞ 事業成果の継続と発展を重視しつつ、現場のモニタリングを実施し、報告書をまとめる。
事業の評価指標を整備し、事業を適切にモニターし、年次の評価を実施する。
出版や図書館の専門家と連携し、プロジェクト運営の質を高める。

＜実施＞

・事業のモニタリングは適切に実施されているが、事業単位での報告書としてはまとめれらなかった。Ⅰ-1 事業に関わるラオス政府とのMoUでは、四半期ごとのモニタリングが義務づけられており、半年に一度のカウンターパートとの会議もおこなわれ、状況把握がなされている。

・出版や図書館の専門家によりアドバイスを受けることで、プロジェクト運営の質を高めている。

・駐在員の働きにより、組織運営に関し情報交換が日常的におこなわれ、プロジェクトは着実に実施されている。

Ⅶ-３ 資金調達

＜計画＞ 寄付メニューを対象別に分かりやすい内容で構成し、広報に活用。英語版も作成する。
対象に合わせたメディアにより広報力を強化し、各資金調達を的確にすすめる。

＜実施＞

・人的な制限から、前年度より回数は減少したものの、さまざまなツールで発信活動を継続した。

	今年度	2022年度	2021年度
ホームページ 記事発信	10回	17回	33回
ブログ 記事投稿	4回	7回	7回
フェイスブック 記事投稿	53回	63回	94回
フェイスブックフォロワー	1,570人	1,537人	1,423人
インスタグラム 記事投稿	17件	16件	29件
ツイッター 記事投稿	10件	13件	17件
新聞 記事掲載	5回	6回	6回

・紙媒体では「ラオスのこども通信」を以下の通り年2回 計2,500部発行した。

　86号（12月発行）特集「子どもたちの明日の基礎をつくる本との出会い」

　87号（4月発行）特集「はじめる、つながる、つくりだす」

「年次報告書」は12月に600部発行。奨学金を支援するマンスリーサポーター向けに「マンスリーサポーター通信」を10月と3月に発行した。

・賛助会員会費が税制優遇を受けられるようになったことで、会員拡充キャンペーンを実施し、会

員数や会費入金額を増加させることができた。
・マンスリーサポーター促進キャンペーンは、事業実施の進捗状況にともない、キャンペーンの実施を延期した。
・冬募金は「本との出会いをラオスの子どもたちに！」と題し、学校図書室の開設のための募金を募り、53名の方から合計570,620円のご寄付をいただいた。目標には届かなかったが、2か所の図書室を開設できることとなった。
・オリジナルカレンダーは、「子どもたちの目」と題する2024年カレンダーを1500部製作。950部を販売し、821,001円の売上となり、目標金額を達成できた。
・ラオス語図書の販売は、5月のラオスフェスティバルを中心に実施。その他、BASEショップでも年間を通じて販売し。約15万円の売上となった。ただ、BASEショップは、人手不足もあり、更新頻度をなかなかあげられていない。
・今期もインターンの協力のもと「書き損じはがき・未使用切手回収キャンペーン」の第3弾を実施。読売新聞、京都新聞、熊本日日新聞、中国新聞、山陰中央新報（掲載順）に記事が掲載されたおかげで、2023年12月～2024年4月で427件、葉書14,938枚、切手1,291,873円、総額1,987,147円相当の支援をいただき、目標を大きく上回ることができた。
・英語の広報ツールを作成し、在外ラオス人からの寄付を呼びかけ、反響を得た。

＜成果と課題＞

財務改善のため資金調達に組織として集中的に取り組み、ある程度の成果を上げることが出来た。昨年に続き、書き損じキャンペーンがメディアで取り上げられたことで、新しい方々への接点ができ、支援者となってくださる方もいる。インターンの協力もあり、各種発信活動もおこなうことが出来たが、限られた体制で、どのアプローチを強化、工夫すべきかを引き続き意識する必要がある。

Ⅶ-4 人材育成

＜計画＞ 専門家とアドバイザーの指導と協力により、募金、広報、事業評価、図書館、出版の領域で実務研修とする。

＜実施＞

「書き損じハガキキャンペーン」においては、インターンに対するアドバイザーの指導と協力により、成果を上げることができた。

＜成果と課題＞

組織活動の発展のためには、ファンドレイジングや広報に関わる人材の育成、プロジェクト運営のためには、読書推進活動にかかわる人材の専門性の育成が必要である。

Ⅶ-5 活動ミーティング・勉強会

＜計画＞ 定期的な開催を休止する代わりに、活動報告会などの開催をおこなう。

＜実施＞ 4月27日に、渡邉淳子駐在員により帰国活動報告会をおこなった。

Ⅶ-6 ネットワーク

＜計画＞ 国際協力ＮＧＯセンター（JANIC）、教育協力ＮＧＯネットワーク（JNNE）のネットワークを維持する。

＜実施＞

国際協力ＮＧＯセンター（ＪＡＮＩＣ）正会員、教育協力ＮＧＯネットワーク（ＪＮＮＥ）会員を今年度も継続し、森透理事がＪＮＮＥ代表を務めた。

Ⅶ-7 インターン・ボランティア

＜計画＞ 開発教育の一環としてインターン・ボランティアを受け入れる。会計など専門ボランティアを募集する。

＜実施＞

インターンは継続で１名（佐々木美咲さん）が事務所業務をサポートしてくれた。また例年通り、会計の専門ボランティア（風間美苗さん、福島孝好さん）が、会計業務を担ってくださった。4月～5月のピーマイやラオスフェスティバルなどのイベントでは多くのボランティアに支えていただいた。専門ボランティアの募集はできなかった。

＜成果と課題＞

「書き損じハガキ収集キャンペーン」や「ラオス語絵本プロジェクト」で、インターンの役割は大きく、大いに貢献してくれている。

Ⅷ ラオス事務所　運営

以下の体制で運営を担当した。

スラピー	ラオス事務所所長　2011年7月から事務所所長	2006年1月入職
チャンシー	事務所図書室、図書在庫管理	1998年8月入職
バンロップ	読書推進事業、図書委託販売	2013年7月入職
スパポーン	総務、会計、読書推進事業	2014年12月入職
ティンリー	総務、会計	2024年6月入職
ダラー	顧問	

2024年6月より総務や会計を担当するティンリーが加わり体制を強化することができた。
上記に加え、渡邉淳子に駐在員として、事業および組織運営のサポート業務を委託した。

Ⅷ-１　事業運営

＜計画＞ 各プロジェクトを着実に実施する。
MoUに定められた報告書の提出、評価会議の開催、所轄庁への報告を確実に実行する。

＜実施＞

・「中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業」は、2023年5月に事業を開始し、初年度の事業を順調に進めることができた。事業地であるヴィエンチャン県や郡の教育スポーツ局とは連絡を密に保ち、ＭｏＵに定められた報告書の提出や会議の開催など実行することができた。

・「学校図書室の整備」「出版事業」は、若干の遅れがあったものの、ほぼ計画通りに実施できた。「子ども教育支援事業」は状況把握に時間を使い、奨学金の支給開始は遅らせることとした。

＜成果と課題＞

人的にギリギリの体制の中で、スタッフは事業を担い貢献的な働きを続けてくれた。これまでの事業実施での経験から、ラオス事務所スタッフは、ある程度イニシアチブをもって活動が出来るようになっている。

Ⅷ-2 組織運営

＜計画＞ 事業の実施状況の振り返りがおこなわれ、事業計画案と予算案に反映される。
活動理念･使命が共有される。
スタッフ会議、東京事務所との会議を定期的に開催し、各事業の進捗確認、調整などがおこなわれる。
事業運営が適切にモニターされ、年2回、ラオス事務所としての報告をまとめる。
新規人材の雇用、及び、図書出版の業務委託を検討する。

＜実施＞

ラオス事務所内でのミーティングは毎週、両事務所合同ミーティングは1～2か月に1回、継続的に開催され、事業進捗状況などの共有が日常的におこなわれた。ただし、報告書など文章化して東京事務所に報告することは得意でなく、改善が難しい。ＳＮＳでの日々の情報共有は改善してきたが、書面でのまとめは遅れがちで充分な改善となっていない。出退勤管理の厳格な運用は難しい。
総務会計の人材雇用はできたが、運営を担う人材の新規雇用は条件が合わず採用に至らなかった。ラオスのインフレ激化と東京側の能力とでバランスをとることが難しい。

＜成果と課題＞

ラオススタッフは、現場での事業運営を担うことがある程度可能となっている。全体の能力は向上しているが、スタッフを今後の組織運営を担う人材として育成するため、より一層、意識的な働きかけが必要となっている。
ラオスの諸法規を共有した上で、コンプライアンスの意識を高め、よりルールに基づく運営が実施されるように改善する必要がある。

Ⅷ-3 資金調達

＜計画＞【図書販売】
販売戦略をたて、販売実績を分析し売れる本の出版を増やし、更なる売上の増額を目指す。
これまでのルート以外、国際機関、国際協力ＮＧＯ、私立学校などに広げ、販売先を10か所増やす。
【受託事業】
ＮＧＯや国際機関などからの業務委託を継続するために、資料を作成し、広報をおこなう。

＜実施＞

【図書の販売】

ラオスでの図書販売売り上げは約215,000円となり、例年の売上や目標値を大きく下回った。事業の実施に追われ、戦略をたてて販売する活動ができなかったことによるが、ラオスのインフレや経済状況の悪化の影響も大きいと感じる。新たな販売先の開拓に取り組むこともできなかった。

【受託事業】

事業の実施に追われ、業務委託を受ける為の働きかけができず、今期は受託事業がなかった。

＜成果と課題＞

会が持つ読書推進活動ノウハウをより生かし、ラオスの子どもたちが読書の機会を得られるよう、国際協力団体からの事業委託を広げる計画であったが、充分な働きかけができなかった。

図書出版において、政府機関からの認証を得るようにしたことから、今後、販路を広げられると期待する。

Ⅷ-４ 人材育成

＜計画＞ 専門家の指導と協力を受けつつ、プロセスを通しての実務研修をおこない、着実な人材育成に取り組む。
タイでの学校図書館の活動事例を視察するスタッフの研修を実施する

＜実施＞

3月～4月に実施した「授業における図書活用研修」では、日本から（2か所は現地を訪問し。5か所はオンラインで）参加した下田専門家のアドバイスを受けながら、スタッフがファシリテーターとしてワークショップを実施した。ここ数年、経験を積み、能力が向上してきている。

タイ東北部ブンカン県で実施の地域の物語から絵本を制作するプロジェクトの研修に参加できることになり、2023年７月初めにスタッフ3名が参加した。

Ⅷ-5 広報

＜計画＞ フェイスブック、ブログなどにより活動成果を発信し、国際機関、国際協力ＮGOへの事業受託に結びつける
会発行の図書を積極的に広報することで、生徒・学校などに対し図書の魅力、有効性を伝える。

＜実施＞

ラオス事務所のフェイスブックページは、１年間で、昨年度よりも多い47回の記事を投稿し、積極的に活動紹介やイベントの宣伝をした。

Ⅷ-6 ネットワーク

＜計画＞ 国際協力ＮＧＯ、日系ＮＧＯとの連携を維持するとともに、ラオスのNGOでの中で当会の認知を広める。

＜実施＞

国際協力ＮＧＯ（ＩNGO）内では、WhatsAppグループで日々の情報交換を行っている。日系ＮＧＯ（ＪANM）との連携は、コロナ禍以降、駐在員間の情報交換をより密におこなっている。

Ⅷ-7 インターン・ボランティア

＜計画＞ 社会開発やＮＧＯへの理解を深めるため、インターンやボランティアを受け入れる。

＜実施＞

2023年9月に、東京事務所のインターンであった矢野みなみさんを受入れた。この他、ヴィエンチャン在住の高橋さん、船津さんが定期的にボランティア活動をおこなってくれた。

Ⅷ-8 訪問受入れ・イベント参加

＜実施＞

この1年、以下のような受入やイベント実施をおこなった。

8/8	JICA教師海外研修 受入れ
10/19	大田原市立金田北中学校　オンライン授業参加
11/24-12/3	ブックフェスティバル出展(ヴィエンチャンセンター)
12/5-7	ＪICA東京・本部からの事業地視察 受入
12/26	ミュージックシェアリング 訪問受入れ
5/30	子どもの日イベント（ヴィエンチャン都教育局）出展